_

せるようにしたいがためでありました。ので母は今一度お金持の家に奉公してお金をもうけ一家が暮つかり貧乏になり、たくさんなお金を払わねばならなかった一母親は二年前にアルゼンチンの首府ブエーノスアイレスへ上ノアからアメリカまでただ一人で母をたずねて行きました。当う何年か前、ジェノアの少年で十三になる男の子が、ジ

おいて出かけたのでした。
このあわれな母親は十八歳になる子と十一歳になる子とを

船は無事で海の上を走りました。

..。る人の世話でその土地の立派な人の家に働くことになりましる人の世話でその土地の立派な人の家に働くことになりまし、 母親はブエーノスアイレスにつくとすぐに夫の兄弟にあた

父親も心の正しい人でしたから一生懸命に働いてよい評判ないで、三月ごとにたまったお金を故郷へ送りました。母親は月に八十リラずつもうけましたが自分は少しも使わ

い方の子は母を慕って毎日泣いていました。はまるでからっぽのようにさびしいものでした。ことに小さ親が早くかえってくるのをまつことでした。母親がいない家をうけるようになりました。父親のただ一つのなぐさめは母

月日は早くもたって一年はすぎました。母親の方からは、

何のたよりもなくなってしまいました。身体の工合が少しよくないというみじかい手紙がきたきり、

何の返事もありませんでした。
父親は大変心配して兄弟の所へ二度も手紙を出しましたが

が見あたりません。」といってきました。月ほどたってから「新聞にも広告してずいぶんたずねましたそこでイタリイの領事館からたずねてもらいましたが、三

方の子は父親にだきついて「お母さんは、お母さんは、」とい親と二人の子供は心配でなりませんでした。わけても小さいそれから幾月かたちました。何のたよりもありません。父

っていました。

年上の子も今ではだんだん働いて手助をしてくれるので、一っえました。けれども父親は働かねばなりませんでした。一番父親は自分がアメリカへいって妻をさがしてこようかと考

さい子のマルコが、親子は毎日悲しい言葉をくりかえしていると、ある晩、小

家にとっては、はなすわけにはゆきませんでした。

ねてきますから。」「お父さん僕をアメリカへやって下さい。おかあさんをたず

と元気のよい声でいいました。

いのに。」と思ったからでした。アメリカへやることが出来よう。大人でさえなかなか行けな父親は心の中で、「どうして小さい子供を一人で一月もかかる父親は悲しそうに、頭をふって何の返事もしませんでした、

その次の日も、毎日毎日、父親にすがりついてたのみました。けれどもマルコはどうしてもききませんでした。その日も、

こういって父親にせがみました。父親はマルコの勇気にすます。もしも見つからなかったら領事館をたずねてゆきます。」せんか。一ぺんそこへゆきさえすればおじさんの家をさがし「どうしてもやって下さい。外の人だって行ったじゃありま

切符を一枚ただくれました。すると船長はすっかり感心してアルゼンチンの国へ行く三等父親はこのことを自分の知っているある汽船の船長に話し

っかり動かされてしまいました。

こ。 をもわたしました。マルコは四月の晴れた晩、船にのりましをルコのポケットにいくらかのお金を入れ、おじさんの所 書ことになりました。父と兄とはふくろにマルコの着物を入れ、そこでいよいよマルコは父親も承知してくれたので旅立つ

父親は涙を流してマルコにいいました。

「らんにん、「うんにない」になった、なった、マルコは船の甲板に立って帽子をふりながら叫びました。う。勇気を出して行きな、どんな辛いことがあっても。」「マルコ、孝行の旅だから神様はきっと守って下さるでしょ

でした。

「お父さん、行ってきますよ。きっと、きっと、……」

u。 人もなく、自分一人小さなふくろの前にうずくまっていましくさんな人たちが乗りあっていましたがだれ一人として知るがは美しい故郷の町をはなれました、大きな船の上にはた青い美しい月の光りが海の上にひろがっていました。

でしまったという考えでした。マルコは夜もねむることが出た。そして一番悲しく浮んできたのは――おかあさんが死んマルコの心の中にはいろいろな悲しい考えが浮んできまし

来ませんでした。

ぬ国へゆくと思うと急に心が苦しくなってきました。どもそれはしばらくの間でした、自分が一人ぼっちで見知らを見た時には元気も出てきました。望も出てきました。けれでも、ジブラルタルの海峡がすぎた後で、はじめて大西洋

アントでのはの目のほかで、まつで気の引に対ないのだいらへおちてゆくと海の面は火のように真赤になりました。上へ美しい飛魚がはね上ることもありました。日が波のあち船は白い波がしらをけって進んでゆきました。時々甲板の

たいくつそうにぼんやりとしていました。て死んでいるもののように見えました。大ぜいの人たちも、マルコはもはや力も抜けてしまって板の間に身体をのばし

町の近くに農夫をしている息子をたずねてアメリカへゆく人しになりました。それはロムバルディの人で、ロサーリオのいいい日がつづきました。マルコは一人のおじいさんと仲よこうして二十七日間つづきました。しかししまいには凉し海と空、空と海、昨日も今日も船は進んでゆきました。

「大丈夫だよ。もうじきにおかあさんにあわれますよ。」すと、おじいさんは大変同情して、マルコはこのおじいさんにすっかり自分の身の上を話しま

そしてマルコは首にかけていた十字のメダルにキスしながマルコはこれをきいてたいそう心を丈夫にしました。といいました。

アルゼンチンの首府ブエーノスアイレスの都の岸にひろがっ善出発してから二十七日目、それは美しい五月の朝、汽船はら「どうかおかあさんにあわせて下さい。」と祈りました。

が ている大きなプラータ河に錨を下ろしました。マルコは気ち いのようによろこびました。

あえるのだ。ああ自分はアメリカへ来たのだ。」 「かあさんはもうわずかな所にいる。もうしばらくのうちに

陸して勇ましく都の方に向って歩きだしました。 マルコは小さいふくろを手に持ってボートから波止場に上

ら、今自分が出てきた街を指しながらていねいに教えてくれたずねました、ちょうどその人はイタリイ人でありましたか ロスアルテス街へ行くにはどう行けばよいか教えて下さいと 一番はじめの街の入口にはいると、マルコは一人の男に、

マルコはお礼をいって教えてもらった道を急ぎました。

それはせまい真すぐな街でした。道の両側にはひくい白い

家がたちならんでいて、街にはたくさんな人や、馬車や、荷 も色々な色をした大きな旗がひるがえっていて、それには大 車がひっきりなしに通っていました。そしてそこにもここに

きな字で汽船の出る広告が書いてありました。

しや自分の母親でないかしらと思いました。 る街ではないのかと思いました、また女の人にあうたびにも マルコは新しい街にくるたびに、それが自分のさがしてい

ました。そして小さな組糸店にはいりました。これが一七五 さんの店は一七五番でした。マルコは夢中になってかけ出し れが自分のたずねているロスアルテス街でありました。 いる街へ出ました。マルコはそのかどをまがってみると、そ マルコは一生懸命に歩きました。と、ある十文字になって おじ

でした。見ると店には髪の毛の白い眼鏡をかけた女の人がい

ました。

「何か用でもあるの?」 女はスペイン語でたずねました。

「あの、これはフランセスコメレリの店ではありませんか。」

「メレリさんはずっと前に死にましたよ。」

と女の人は答えました。

マルコは胸をうたれたような気がしました、 そして彼は早

口にこういいました。

さんをたずねてアメリカへ来たのです。わたしはおかあさん はメキネズさんの所へ奉公していたんです。わたしはおかあ を見つけねばなりません。」 「メレリが僕のおかあさんを知っていたんです。おかあさん

「可愛そうにねえ!」

子供にきいて上げよう。あの子がメレリさんの使をしたこと と女の人はいいました。そして「わたしは知らないが裏の -3-

があるかもしれないから――、」

かれた。時々わたしも行きましたよ。 ぐにきました。そして「メレリさんはメキネズさんの所へゆ 女の人は店を出ていってその少年を呼びました。 ロスアルテス街のはし 少年はす

の方です。」

と答えてくれました。

「ああ、ありがとう、奥さん」

マルコは叫びました。

ない?」 「番地を教えて下さいませんか。君、僕と一しょに来てくれ マルコは熱心にいいましたので少年は、

「では行こう」

といってすぐに出かけました。

二人はだまったまま長い街を走るように歩きました。

こには美しい門がたっていました。門の中には草花の鉢がた街のはしまでゆくと小さい白い家の入口につきました。そ

くさん見えました。

出てきました。

「メキネズさんはここにいますねえ?」

少年は心配そうにききました。

「メキネズさんはコルドバへ行きましたよ。」

マルコは胸がドキドキしました。

んをつれて行きましたか。」女はどうなりましたか。わたしのおかあさんです。おかあさ「コルドバ? コルドバってどこです、そして奉公していた

マルコはふるえるような声でききました。

若い女の人はマルコを見ながらいいました。

しばらくするとその父はかえってきました。背の高いひげいるかもしれません、しばらく待っていらっしゃい。」「わたしは知りませんわ、もしかするとわたしの父が知って

の白い紳士でした。

紳士はマルコに

「お前のおかあさんはジェノア人でしょう。」

と問いました。

マルコはそうですと答えました。

「それならそのメキネズさんのところにいた女の人はコルド

バという都へゆきましたよ。」

ていざは仏はコレジベトのままた。マルコは深いため息をつきました。そして

「かわいそうに。コルドバはここから何百點のある。」「それでは私はコルドバへゆきます。」

紳士はこういいました。

マルコは死んだように、門によりかかりました。

か考えていました。が、やがて机に向って、一通の手紙を書紳士はマルコの様子を見て、かわいそうに思いしきりに何

いてマルコにわたしながらいいました。

おもち。」 「それではこの手紙をポカへ持っておいで、ここからポカへ 「それではこの手紙をポカへ持っておいで、ここからポカへ 「それではこの手紙をポカへ持っておいで、ここからポカへ 「それではこの手紙をポカへ持っておいで、ここからポカへ

も別れてポカの方へ向って出かけました。ふくろを持って外へ出ました。そして案内してくれた少年と、マルコはただ「ありがとう、ありがとう」といって小さいこういって紳士はいくらかのお金をマルコにあたえました。

_

てきました。そしてその次の日の暮れ方、果物をつんだ大き、マルコはすっかりつかれてしまいました。息が苦しくなっ

な船にのり込みました。

いました。ゆくこともありました。その島にはオレンヂの木がしげってゆくこともありました。その島にはオレンヂの木がしげって船は三日四晩走りつづけました。ある時は長い島をぬうて

言葉もかけませんでした。を食べました。船頭たちはマルコのかなしそうな様子を見て、マルコは船の中で一日に二度ずつ少しのパンと塩かけの肉

ましんとおらついてきました。そして「コレドバーの名を呼広々とした水の上や遠い岸を銀色に照しました、マルコの心でになるとマルコは甲板で眠りました。青白い月の光りが

してなりませんでした。んでいるとまるで昔ばなしにきいた不思議な都のような気がはしんとおちついてきました。そして「コルドバ」の名を呼

した。 うどマルコが小さい時おかあさんからきいた子守唄のようで善船頭は甲板に立ってうたをうたいました、そのうたはちょ

ii 、 i 。 マルコは急になつかしくなってとうとう泣き出してしまい

ました。

ら遠く来たからって泣くことがあるものか。ジェノアの児は「おいどうしたので、しっかりしなよ。ジェノアの子が国か「船頭は歌をやめるとマルコの方へかけよってきて、

に元気づきました。 といいました。マルコはジェノアたましいの声をきくと急

世界にほこる子だぞ。」

「ああそうだ、わたしはジェノアの児だ。」

マルコは心の中で叫びました。

船は夜のあけ方に、パラアナ河にのぞんでいるロサーリオ

の都の前にきました。

をゆきました。てくれた手紙をもってアルゼンチンの紳士をたずねに町の方でくれた手紙をもってアルゼンチンの紳士をたずねに町の方でルコは船をすててふくろを手にもってポカの紳士が書い

町にはたくさんな人や、馬や、車がたくさん通っていまし

マルコは一時間あまりもたずね歩くと、やっとその家を見

つけました。

た。

「何の用か、」

とぶっきらぼうにいいました。

マルコは書いてもらった手紙を出しました。その男はその

手紙を読んで

れて出かけられた。」 「主人は昨日の午後ブエーノスアイレスへ御家の人たちをつ

といいました。

マルコはどういってよいかわかりませんでした。ただそこ

「わたしはここでだれも知りません。」に棒のように立っていました。そして

とあわれそうな声でいいました。するとその男は

といってぴしゃりと戸をしめてしまいました。「物もらいをするならイタリイでやれ、」

マルコは胸をかきむしられたような気がしました。そしてマルコはふくろをとりあげてしょんぼりと出かけました。

「わたしはどこへ行ったらよいのだろう。もうお金もなくな

った。」

ルディのお百姓でありました。 でいった人がありました。マルコはひょっと顔を上すの言葉でいった人がありました。マルコはひょっと顔を上ました。するとやがて「おいどうしたんだい。」とロムバルデエとにうつむいていました、道を通りがかりの子供たちはマルコはもう歩く元気もなくなって、ふくろを道におろし

マルコはおどろいて、

「まあ、おじいさん!」

と叫ひました

コは自分の今までの有様を残らず話しました。お百姓もおどろいてマルコのそばへかけて来ました。マル

したが、やがて、お百姓は大変可愛そうに思って、何かしきりに考えていま

りました。

りました。「「マルコ、わたしと一緒にお出でどうにかなるでしました。看板には「イタリイの星」と書いてあ二人は長い道を歩きました、やがてお百姓は一軒の宿屋の戸といって歩き出しました。マルコは後について歩きました。「マルコ、わたしと一緒にお出でどうにかなるでしょう。」

お百姓はマルコを自分の前に立たせ皆にむかいながらこう酒をのみながら高い声で笑いながら話しあっていました。二人は大きな部屋へはいりました。そこには大勢の人がお

いそうな子供がいます。この子はイタリイの子供です。ジェ「皆さん、しばらくわたしの話を聞いて下さい、ここにかわ

叫びました。

せんか。」 何とかいい考えが皆さんにありま銭も持っていないのです。何とかいい考えが皆さんにありま子です。ところがこんどはコルドバへ行くのですがお金を一ノアからブエーノスアイレスまで母親をたずねて一人で来た

といいました。するとその中の一人は、テエブルをたたい「とんでもないことだ。そんなことが出来るものか」これをきいた五六人のものは立ち上って、

こういってその男はマルコの肩をたたきふくろを下してやいがよい。」い。わしたちが母親のところへとどけてあげるから心配しないぞ。愛国者だ、さあこちらへ来な、葡萄酒でものんだがよねばならぬぞ。全く孝行者だ。一人できたのか。ほんとに偉「おい、我々の兄弟だ。われわれの兄弟のために助けてやら

りました。に帽子を持ってまわるとたちまち四十二リラのお金があつまで出てきました、ロムバルディのおじいさんはマルコのためで出てきました、ロムバルディのおじいさんはマルコのためい。

みんなの者はコップに葡萄酒をついで、

ました。マルコの顔はよろこびにかがやきました。 つぎの朝マルコはよろこび勇んでコルドバへ向って出かけとう。」といって、おじいさんのくびに飛びつきました。 マルコはうれしくてどうしてよいかわからずただ「ありが「お前のおかあさんの無事を祈る。」といってのみました。

マルコは汽車にのりました。汽車は広々とした野原を走っ

れるのではないかと思いました。おかあさんにあうことも出来ませんでした。マルコはもしかすると病気にでもなって倒いました。マルコは寒くてなりませんでした。そればかりでう冬になっているのでした。けれどもマルコは夏の服を着てきました。マルコがジェノアを出た時は四月の末でしたがもてゆきました。つめたい風が汽車の窓からひゅっとはいって

いました。マルコは思わずそこへかけよって、いました。マルコは思わずそこへかけよって、どうしよう。マルコはこう思っている夢を見ました、それは一人どうしよう。マルコはこう思っているうちに眠ってゆきました、そしてコルドバへ行っている夢を見ました、それは一人どうしよう。マルコはこう思っているうちに眠ってゆきましらにおかあさんにあうことがたしかに出来るかしら。もしもコルドバへゆけばきっとお母さんにあえるかしら、ほんと

どうぞ、何もしないで下さい。」おかあさんをたずねに一人できたのです。貧乏な子供です。「わたしは何も持っていません。イタリイから来たのです。

眠られるようにしてくれました。その時はもう広い野には夕らいろいろ言葉をかけ一枚のシオルをマルコの体にまいて、三人の男は彼をかわいそうに思ってマルコの頭をなでなが

といいました。

日がおちていました。

はある教会の名をいいました。家はそのそばにあるのでした。車場の人にメキネズの家はどこにあるかききました。その人マルコは飛びたつように汽車から飛び出しました。彼は停汽車がコルドバにつくと三人の男はマルコをおこしました。

マルコは急いで出かけました。

町はもう夜でした。

出てきました。すると年取った女の人が手にあかりを持ってならしました。すると年取った女の人が手にあかりを持ってマルコはやっと教会を見つけ出して、ふるえる手でベルを

来ないで死んだとしたら……マルコは急にかなしい心になり

「何か用がありますか」

女の人は両手をくんで頭をふりながら答えました。マルコは早口にいいました。「メキネズさんはいますか。」

マルコはがっかりしてしまいました、そしてふるえるよう「メキネズさんはツークーマンへゆかれた。」

さんにあわないで、死んでしまいそうだ。」「そこはどこです。どのくらいはなれているのです。おかあ

な声で、

女の人は気の毒そうにいいました。「まあ可愛そうに、ここから四五百 蟶゚はなれていますよ。」

マルコは顔に手をおしあてて、「わたしはどうしたらいいの

出したように、 女の人はしばらくだまって考えていましたが、やがて思い といって泣き出しました。

「ああ、そうそう、よいことがある、この町を右の方へゆく

-7-

けてゆく商人がいますよ。その人に頼んでつれていってもら い今すぐに行ってごらんなさい。」 いなさい。何か手つだいでもすることにして、それが一番よ と、たくさんの荷車を牛にひかせて明日ツークーマンへ出か

といいました。

かつれていって下さい。おかあさんをさがしにゆくのだから。」 いて仕事の指図をしていました。その人がこの親方でした。 くろをつんでいました。丈の高い口ひげのある男が長靴をは した。しばらくゆくとそこには大ぜいの男が荷車に穀物のふ とたのみました。 マルコはおそるおそるその人のそばへ行って「自分もどう マルコはお礼をいいながらふくろをかつぎ急いで出かけま

「お前をのせてゆく場所がない。」 親方はマルコの様子をじろじろと見ながら

とつめたく答えました。

マルコは一生懸命になって、 たのみました。

中で働きます。牛や馬の飲水もはこびます。どんな御用でも いたします。どうぞつれて行って下さい。」 「ここに十五リラあります。これをさしあげます。 親方はまたじろじろとマルコを見てから、今度はいくらか そして途

かなければならぬぞ。」 で下りねばならないし、それに下りてからお前はずいぶん歩 いう別の町へゆくのだよ。だからお前をのせていっても途中 やさしい声でいいました。 「おれたちはツークーマンへゆくのではない、サンチヤゴと

「ええ、どんな長い旅でもいたします。どんなことをしまし

い。 てもツークーマンへまいりますからどうかのせていって下さ

マルコはこういってたのみました。

親方はまた

「おい二十日もかかるぞ。 つらい旅だぞ。それに一人で歩か

ねばならないのだぞ。」 といいました。

マルコは元気そうな声でいいました。

「はいどんな事でもこらえます、 おかあさんにさえあえるな

ら。どうぞのせていって下さい」 親方はとうとうマルコの熱心に動かされてしまいました。

そして「よし」といってマルコの手を握りしめました。 「お前は今夜荷車の中でねるのだよ。そして明日の朝、 四時

親方はこういって家の中へはいってゆきました。

におこすぞ。」

の牛にひかれてゆきました。そのあとからはたくさんな馬も 荷車の長い列はがたがたと動き出しました。荷車はみな六頭 ついてゆきました。 朝の四時になりました。星はつめたそうに光っていました。

が行軍するのと同じように規則正しくやりました。 まり、夕方の五時に出て十時にとまりました。ちょうど兵隊 れからまた出かけました。みんなは毎朝五時に出て九時にと るのでした。みんなは食事がすむとしばらくひるねをしてそ しまって、人足たちは火をたきながらパンをやいて食べてい しまいました。マルコが目をさますと、荷車の列はとまって マルコは車に積んだ袋の上にのりました。がすぐに眠って

をくんできたり角灯の掃除をしたりしました。 マルコはパンをやく火をこしらえたり牛や馬にのませる水

しでもおそいと大きな声で叱りつけました。 として少いないのでした。人足たちはだんだん意地悪くなって、マルりませんでした。人足たちはだんだん意地悪くなって、マルリませんでした。人足たちはだんだん意地悪くなって、マルリませんでした。人足たちはだんだん意地悪くなって、マルーをおどかしたり無理使したりしました。大きな「株」をはこば、まずに一散にかけてゆきました。くる日もくる日もただ広いりませんでした。人足たちはだんだん意地悪くなって、マルカんなの進む所は、どちらを見ても広い平野がつづいていしでもおそいと大きな声で叱りつけました。

て息をすることさえ出来ませんでした。になり、おまけに風が吹いてくると赤い土ほこりがたってき来ませんでした、荷車はぎいぎいとゆれ、体はころがるようマルコはへとへとにつかれて、夜になっても眠ることが出

くろに顔をあてて泣いていました。親方だけでした。マルコは車のすみに小さくうずくまってふなってゆきました。ただマルコをかわいがってくれるものはまで叱られたりいじめられたりするので日に日に元気もなくマルコは全くつかれはててしまいました。それに朝から晩

した。は代る代る彼を足でけりながら、「この宿なし犬め」といいまの一人が、彼をぶちました。それからというものは人足たち

ある朝、マルコが水を汲んでくるのがおそいといって人足

マルコはとうとう病気になりました。三日のあいだ荷車の中マルコは悲しくなってただすすりあげて泣いていました。

ころへきては、切にしてくれるものは親方だけでした。親方はいつも彼のとで何もたべずに苦しんでいました。ただ水をくれたりして親

「しっかりせよ。母親にあえるのだから」

といってなぐさめてくれました。

いって胸の上に手をくんで祈っていました。りに「おかあさん。もうあえないのですか。おかあさん。」とマルコは、もう自分は死ぬのだと思いました。そしてしき

ルコは親方の体にだきついて別れのあいさつをしました。マ親方は何かと心配して道のことを教えてくれたり歩く時にす。親方はマルコに別れなければならないことをいいました。すんゆく道とサンチヤゴへ行く道との分れる所へ来たからでいやました。それはもう九日も旅をつづけたのでツークーマがきました。すると今度は一番安心することの出来ない日親方は親切に看護をしたので、マルコはだんだんよくなっ

-9-

かくれてしまいました。コを見ていました。やがて一隊は平野の赤い土ほこりの中に見送っていました。荷車の親方も人足たちも手をあげてマルーマルコは青い草の道に立って手をあげながら荷車の一隊を

たつと彼の目の前に青々とした山脈を見ることが出来ました。みへはいってふくろを枕にして眠りました。やがていく日かマルコは草の道を歩いてゆきました。夜になると草のしげ

思い出しました。そして自分の国へ来たような気持になりま白い雪が光っていました。マルコは自分の国のアルプス山をマルコは飛びたつようによろこびました。山のてっぺんには

した。

た。また黒い顔をした女や子供たちにもであいました。そのい店もありました。マルコはその店でパンを買ってたべましをつくっている山でした。空気もだんだんあたたかになってその山はアンデズ山でありました。アメリカの大陸の脊骨

人たちはマルコをじっと見ていました。

さんにあえるのだ。」と思うと足のいたさも忘れてしまいまし彼はしくしく泣きながら歩き出しました。けれども「おかあなってしまいました。靴は破れ足から血がにじんでいました、日もそうしました。そうするうちに彼の元気はすっかりなくマルコは歩けるだけ歩くと木の下に眠りました。その次の

た。

とたずねました。「ツークーマンへはここからいくらありますか。」「ツークーマンへはここからいくらありますか。」じみ出ました、また急に元気がなくなって来ました、でもと日、五日、一週間もたちました。彼の足からはたえず血がにはてしない野の間をぬけたり、あの高い青い山を見ながら四はは元気を出して歩きました。ひろいきび畑を通ったり、

りました。けれども母親

は

女の人は、

と答えました。「ツークーマンはここから二聾嗚ほどだよ。」

くてなりませんでした。した。彼の力はすぐに抜けました。けれども心の中はうれししたように歩き出しました。しかしそれはほんのしばらくでマルコはよろこびました。そしてなくした元気をとりもど

幸福でありました。マルコは光っている星に話でもするようをのばして美しい星空を眺めました。この時はマルコの心は星はきらきらとかがやいていました、マルコは草の上に体

にいいました。

って下さるのですか。」ん、あなたは今何を思っていられますか。マルコのことを思ん、あなたは今何を思っていられますか。マルコのことを思こんなに近くにいます。どうぞ無事でいて下さい、おかあさ「ああおかあさん、あなたの子のマルコは今ここにいます。

おりませんでした。それで手術をしてもらうということになた。けれども大変な重い病気だったのでどれだけたってもなでした、その時母親は腫物が体の内に出来たので外科のお医ねていました。ところがメキネズは思いがけずブエーノスアマルコの母親は病気にかかってメキネズの立派なやしきに

う苦しまずに死にとうございます。」でしまいます。どうかこのまま死なせて下さい。わたしはも「わたしはもうこらえる力がありません。手術のうちに死ん

といいました。

元気を出しなさい、子供たちのためにも早くなおらなければ主人と奥さんは「手術をうけると早くなおるから、もっと

なりません。」としずかにいってきかせました。

母親はたださめざめと泣きだしました。

もうお医者さまにかかりたくありません。わたしはここで死何かとお世話になりましてありがとうございます。わたしはも死んでゆきたい。旦那様、奥さま、ありがとうございます。「おお子供たち、みんなはもう生きていないだろう。わたし

をとって慰めました。 主人は「そんなことをいうものではない」といって女の手

にとうございます。」

だ。」主人はこういってそこにぼんやりと立っていました。きて、あんなに働いたあとで死んでゆく。ほん当に可哀そう見守っていました。「家を助けるために三千里もはなれた国へ主人と奥さんとはろうそくのかすかな光でこのあわれな女をけれども彼女はまるで死んだように眼をとじていました。

ぼらしいほこりだらけの少年をじっと見ていました。 かみ かいほこりだらけの少年をじっと見ていました。 みっともにぎやかな街で、まっすぐな長い道と、ひくい白い家とがありました。 か母親にあいはしないかと女の人にあうたびにじっと見ました。 女の人みんなに自分の母親でないようにすみ切った青空であか母親にあいはしないかと女の人にあうたびにじっと見ました。 すっとした。 はばをずんずんずいようにすみ切った青空であれるツークーマンの町へはいりました。 ここもまた同じようぎの日の朝早くアルゼンチンの国でもっともにぎやかな町でぎの日の朝早くアルゼンチンの国でもっともにぎやかな町ですいコはいたい足をひきずりながら、ふくろをせおって次

ました。屋の看板が目につきました。中には眼鏡をかけた男の人がい

マルコはかけていってたずねました。

ょうか。」 「ちょっとおたずねしますがメキネズさんの家はどちらでし

男の人はちょっと考えていましたが、

れているサラヂーロというところだ。」「メキネズさんはここにはいないよ。ここから六丈のほどはな

と答えました。

入れました。だ、どうしたというのだ、」といいながらマルコを部屋の中へだ、どうしたというのだ、」といいながらマルコを部屋の中へました。すると宿屋の主人や女たちが出てきて、「どうしたのマルコは剣で胸をつかれたようにそこに打ち倒れてしまいーマルコは剣で胸をつかれたようにそこに打ち倒れてしまい

主人は彼をなだめるようにいいました。

しばらくするとマルコは生きかえったようにおき上りながメキネズさんの家がある。誰でも知っているよ、安心なさい、」でゆける。川のそばの大きな砂糖工場がたっているところに「さあ、何も心配することはない。ここからしばらくの時間

「どちらへ行くんです、どうぞ早く道を教えて下さい。私は

Ď,

といいました。すぐにゆきます。」

主人は、

とすすめました。で休んで明日ゆきなさい、一日かかるのだから。」「お前はつかれている、休まないと行かれない。今日はここ

ばらく行くと道の左かわにイタリイの名の書いてある宿

. .

ればなりません。すぐにゆきます。」 「いけません。いけません。私は早くおかあさんにあわなけ

こんもりとした並木が立ちならんでいました。マルコは足の いたいことも忘れて歩きました。 よろこんで教えてもらった道を急ぎました。道の両がわには ざわざ町はずれの森まで送ってよこしました。マルコは大変 マルコの強い心に動かされて、宿屋の主人は一人の男をわ

さまを呼んで下さい。助けて下さい。わたしはもう死にます。」 といいました。 その夜母親は大そう苦しんでもう息も切れ切れに、「お医者

にあえるのだ。」という心が胸にわいてきて足のいたいことも いく度となくころびました、けれどもマルコは「おかあさん もう夜中でありました。マルコはもう歩む力もなくなって 主人や奥さんや女中たちは女の手をとってなぐさめました。

第に消えてゆきました。 忘れてしまいました。 やがて東の空がしらじらとあけてきて、銀のような星も次

をうける気はありませんでした。手術をうけないうちに死ん きらめずにもう一度いってみました。 でゆくのだとあきらめているからでした。医者はそれでもあ めました。けれどもそれは無駄でした。女はどうしても手術 術をうけるようにすすめました。メキネズ夫婦もそれをすす 一人の助手をつれて病人の家へ来ました。そしてしきりに手 朝の八時になりました。ツークーマンのお医者さんは若い

「わたしはこのまま安らかに死んでゆきとうございます。」

けれども女は

に送ってやってください、私はこれで死んでゆきます。 「奥さま、わたしの荷物と、この少しばかりのお金を家の者 といいました、そしてまた消えてゆくような声で、

ああマルコが……」 が出来ません。小さい子のマルコはどうしているでしょう、 ぞ私の家へ手紙も出して下さい。わたしは子供を忘れること どう

といいました。

てはいってきました。主人も奥さんもはいってきました。 けてゆきました。しばらくすると医者はよろこばしい顔をし その時、主人もいませんでした。奥さんはあわただしくか

「ジョセハ、うれしいことをきかせてあげるよ。」

「おどろいてはいけません。」 女はじっとその声をきいていました。

子にあうのですよ。 「お前がよろこぶことですよ、お前の大そう可愛がっている

けの力を出して頭をあげました。 女はきらきらする目で奥さんを見ました。 そしてありった

マルコが入口に立ったのでした。 その時でした、ぼろぼろの服をきてほこりだらけになった

ああほんとうに」と叫びました。 てここへ来たのほんとうにお前なのか。本当にマルコだねえ、 マルコをだきしめました。そして気ちがいのように「どうし マルコはかけよりました。母親はやせた細い手をのばして 女はびっくりして「あっ」と叫び声をあげました。

女はすぐに医者の方をむいていい出しました。

に見せないで。」わたしは早くよくなりたいです。どうぞお医者さま、マルコわたしは早くよくなりたいです。どうぞお医者さま、マルコ「お医者様、どうぞなおして下さい。早く手術をして下さい。

マルコは主人につれられて部屋を出ました。奥さんも女た

ちもいそいで出てゆきました。

マルコは不思議でなりませんでしたから、

⁻おかあさんをどうするのですか。」

と主人にたずねました。

した。 主人はおかあさんが病気だから手術を受けるのだといいま

と不意に女の叫び声が家中にひびきました。

。マルコはびっくりして「おかあさんが死んだ。」と叫びまし

した。 医者は入口に出て来て「おかあさんは助かった、」といいま

マルコはしばらくぼんやりと立っていましたが、やがて医

者の足許へかけていって泣きながら、

「お医者さま、ありがとうございます。」

といいました。

しかし医者はマルコの手をとってこういいました。

それはお前です。英雄のように立派なお前だ!」「マルコさん。おかあさんを助けたのは私ではありません。